

D-01 多様な市民ニーズに対応した学習機会の提供

価値観の多様化や働き方の変化などに伴い学習に対するニーズも多様化しており、それぞれのニーズに応じた自主的な学びの場を提供していく必要がある。ついては、生涯にわたる学びの支援と社会教育の振興のため、以下のことについて検討したい。

- 生涯学習センター等で実施している講座には、受講定員や開催日時の都合等の理由で受講できない市民もいる。例えば、高齢者向けのスマホ・タブレット講座や手作りパン講座など、ニーズの高い講座をより多くの市民が参加できるようにしたい。
- 市役所各課で行っている様々な市民向けの講座だけでなく、旧公民館講座から派生した自主サークル、社会教育団体等の活動をポータルサイトで一元管理することで、幅広い学習ニーズに対応し、さらに市民が参加しやすい環境を整えたい。また、市民の多様な学習ニーズに対応できる講師等のマッチングが容易にできるようなシステム(ただし、民間事業者が実施する教養講座などは対象外)を構築したい。
- 講座の受講や施設利用の申込みや料金の支払いまでの一連の手続きを自宅において行えるようにしたい。
- 市民がより多くの学習機会に触れるため、大学等で行われている既存の公開講座等を紹介するだけでなく、個々のライフスタイルに応じて場所や時間を選んで自由に受講できる環境を整えたい。

D-02 文化・芸術の新しい鑑賞方法

価値観の多様化や余暇の拡大などを背景に、心の豊かさを求める人が増える中、日常生活に潤いをもたらし、人と人との交流を生む文化芸術の役割は重要性を増している。

市民が日常的に文化芸術に触れることのできる機会の創出や、多様な市民の文化芸術活動を育む環境をつくることが求められているが、新型コロナウイルス感染症の影響により、さまざまな講演や展覧会等の中止や延期が相次ぎ、市民が文化芸術を鑑賞する機会が減少してしまった。

については、ニューノーマル時代に対応した文化芸術の鑑賞に関して、以下のソリューションについて検討したい。

- 呉市立美術館や蘭島文化振興施設で所蔵されている美術品等について、デジタルアーカイブを構築し、デジタルアーカイブのコンテンツを利用したWEB上での作品の鑑賞ができる環境の構築ができないか。
- 劇場・公会堂(呉市文化ホール)等での芸術鑑賞について、新型コロナウイルス感染症などの拡大防止対策の一つとして、オンラインでの鑑賞ができる環境の構築ができないか。
- 呉市の文化財等についても、ICT等を活用したデジタル情報として記録・保存し、誰もが、ネットワークを通じて鑑賞することができるデジタルミュージアムがつかれないか。

D-03 電子図書館サービスの機能充実

呉市中央図書館は、大正14年に開館、昭和初期からの資料を有し、特に明治中期からの新聞の複写を保存し、利用に供していることが大きな特色である。また、地区図書館の市内6箇所への設置、オンラインシステムによる図書の検索や予約の受付、自動車図書館の運行、さらに令和3年1月から電子図書館サービスを開始するなど、図書館サービスの充実・向上に努めている。

今後も多様化する市民のニーズに答えていくため、以下のことについて検討したい。

- 現在購入している電子書籍約7,300のうち、約4,100は2年間の期限がある。電子化により利便性の高い図書館を目指していく上で、今後、電子書籍と紙媒体の図書をどのようなバランスで購入していくべきか、利用者のニーズを考慮しながら効率的な運用を行う方法について検討したい。
- 昭和20年以降に発刊された中国新聞を、コピーや縮刷版という方法を含めて全て保存しているが、昭和30年代や昭和47年6月以降は紙面のまま書庫に保存しているため、保存場所の確保と紙の劣化が問題となっている。また、閲覧する際に書庫から運び出すための作業に難渋している。
中国新聞は地元に取り添った地方紙で閲覧希望も多く、呉市の記事も多く取り上げられていることから、これからも保存を続けていく予定であるが、デジタルを活用した効率的な保存と閲覧方法について検討したい。
- 図書の電子化を推進するにあたり、図書館の環境整備について検討したい。

D-04 ニューノーマル時代の和ミュージアム展示解説

和ミュージアムでは、平成29年度から日本語・英語・中国語・韓国語の4ヶ国語で館内展示20コンテンツの解説を来館者自身のスマートフォンや貸出用のタブレットで聞くことができる多言語音声ガイドシステムを導入し、翌年にも多言語対応AR展示システムを導入して、館内の5つの展示ポイントでAR対応資料やCGによる解説を行うなど、展示解説の充実を図っている。

また、ボランティアによる館内ガイドは、平成17年の開館時より行っているが、この度の新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、ほぼ1年にわたり中断せざるをえない状況となっている。

このような人から人への解説が難しい状況を踏まえ、ニューノーマル時代にふさわしい展示解説の方法などについて検討したい。

【参考】

□多言語音声ガイドシステム利用実績

H29年1,897件 H30年 8,667件 R1年 10,609件 R2年 1,382件

□多言語対応AR展示システム利用実績

H30年 1,314件 R1年 16,529件 R2年3,429件

□和ミュージアムボランティアの会 案内実績

H30年 14,468人 R1年 19,285人 R2年 0人

※R2年度は、コロナの影響でボランティアガイド案内は実施していない。